16
238

鶴迺舍主人述

東西田川飽海三郡 甲午大地震記

聽雨堂藏

緒言

嗚呼坤軸一轉、俄然トシテ莊内ノ天地ハ平和ノ動機ヲ破リ、地ハ裂ケ水溢レ山崩レ谷塡モレテ烈火天柱ヲ焦シ數百ノ人畜瞬時ニシテ生ヲ失ヒ慟哭叫喚ノ聲天地ニ反響シ悽然トシテ亦坤土ノ大ニ驚カス、記セヨ明治二十七甲午十月二十二日ノ夕天災ノ恐ルベキヲ知レド這般ノ慘事ハ未タ夢幻ニモ現ゼザリキ、地妖ノ警ムベキヲ知レド這般ノ大勢力ハ未タ盲像ニモ浮ハザリキ、來レリ總ノ勢力ヲ壓倒シテ猛然山河ヲ捲キ囂然萬象ヲ振盪シツヽ來レリ、其來ルヤ前兆ナシ安ゾ後警アランヤ、居ナガラニシテ生ヲ失ヒ家資珍寶ヲ蕩盡セシモノ夫レ幾何ゾ、代恐ルベキモノ何ゾ限ラン然レモ震災ホド恐ルベク

警ムベキハアラザルナリ、其發作ハ瞬時ニシテ其動力ハ實ニ夫レ無限、嗚咽ノ間隙ナモ存セズシテたいはノ力量ヲ現シ殺那ノ間ニ萬象ヲ那落ノ底ニ沈了ス、莊内果シテ何ノ罪カアル、民孳々トシテ其業ヲ營ミ俗純朴ニシテ能ク人ヲ愛ス、而シテ尙此災ヲ下ス天道果シテ是乎非乎

主人幸ニ災厄ヲ免カル默シテ止ムハ後昆ニ義ナラズ聊カ概況ヲ記シテ之ヲ傳フ固ヨリ粗雜ヲ極ムト雖窃カニ實ヲ述ブルヲ期ス願クハ諒セヨ

明治二十七年十一月

鶴迺舍主人識

東西田川
飽海三郡

甲午大地震記

見出し

○發端
○地震の原因
○狹震少なる地辷りの結果
○火が燃ふることありや
○地割れの方向
○地震は何時已むものか
○十里塚の船子が話
○此晩
○翌日
○震害の統計
○東田川郡
○地形に及ぼしました被害
○土中の有樣
○今度の地震
○地震に前兆ありや
○硫黄の臭ひがすることありや
○水を噴き出す理屈
○地震の當日
○大山の行商の話
○迷兒
○慘況中の慘況
○飽海郡
○西田川郡
○建物の被害

○調査に來られた學士達
○救恤の事
おしまい
○特筆大書

附錄

◎震災に就き市井のくさ〴〵

附圖

●酒田出町倒潰の圖
●酒田櫻小路燒失の圖
●袖浦役場折れ垣の圖
●東西田川 飽海三郡 甲午大地震地圖

數件

明治二十七年十月二十二日午后五時廿七分

東西田川
飽海三郡

大地震地圖

尺度四十三万二千分一

縣界
郡界

山
川
湖
大邑
村

旧火成岩
近古紀層 水成岩
新火成岩
後近古紀層 沖積層
雄鹿火山脈

三郡中最も輕震地
家屋震動甚しく修繕ヲ加フヘキ箇所ヲ生セシ地
所々亀裂セシモ家屋ノ倒潰少ク然レトモ鹿成ハ土藏大破ヲ免レサルノ地
亀裂甚タシク家屋倒潰セシ地
脚落亀裂噴水甚タシク地震中心認メ得ヘキ地

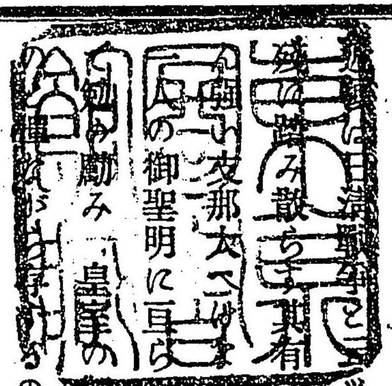
東西田川
飽海三郡

甲午大地震記

鶴の舍主人述

發端

偖て御當代は百事御改良に相成りまして進々と開け來る勢力は誠に旭の山の端を出るが如くスバラシイ御威勢で此大日本帝國も後來世界の筆頭國と相成るべき下地は充分に滿ちて



上は一視同前、莊内も薩摩も其間に相違は無い筈なのに、抑も何たる事ぞ、罪も無い吾莊内人に焦熱地獄の天災を下して阿鼻叫喚の修羅場に陷れんとは、地震、雷、火事、親父とか申して昔より地震は恐しいものとは聞き及びましたが、生れてより二十七年、此の鶴の舍も實際に地震の恐しいことを見もし知もしたるは今が始めてです

明治二十七年十月二十二日午後五時三十七分でう〳〵と響き渡る遠ふ雷のはためくが如き音と共に上下に搖れたる莊内の天地は地面裂け家屋倒れ火の手上りて人畜の死傷は算を亂し其凄さ譬へんにものなく泣き叫ぶ聲呻くおとでう〳〵と雲ッてしよぼ〳〵と降り出した る天氣にうけ今しも世界が亡びて仕舞ふかと思はるゝ迄に皆々生きたる心地とては御坐りませんでした、其有樣は追々御意に入れますが差し當り地震とは何の事でどう云ふふうにおこるものかを御話し申さねばなりません

凡て人は智惠といふものを持ッて居れば何が一ッ事が起れば是れは何の爲めにこうなつたらふと考へ込むは通例です、其智惠の優つたものは優つた考へを出し劣つたものは劣つた考へを出し、昔しは人の智惠で考へ出せないことは皆神樣の仕事と極めて居りました、地震も其通り此大地が時々搖れ出して山裂け河埋めらるゝ洪大無邊の働きをなすものなれば是れはどうしても地下に何か大なる動物が居て搖り動かすに違いないと判斷して地震虫と云ふものを發明しました此地震虫は總身鱗を被り八本の足を備へて日本を負ッて居るものたが、時々寢返りをしたりのびをしたりなどすると大地が搖れ出すと傳へて居りましたが後に此虫は魚と變じ下總邊に頭を置いて鯖や尾などを四方に廣がし鹿嶋大明神の要石がやフと其大動を押へて置くのぢやと申します、斯の樣に地震を動物の仕方と云ひ傳へ置きまし

したは只日本ばかりでは御坐いません、亞米利加の北の方では大きい龜の地中に住んで居つて此れの地震を起すと云ひ、天笠即ち印度では世界を負つて居る大きい象の有るに違いない、何んでも此象が身振いするから地震が起るのぢやでう〳〵と云ふのは象の鼻氣ぢやまさか鼻氣などゝは申しませんが、印度は象の働きとして居ります、蒙古では蝦蟇、セレベスと云ふ嶋では豚、サイベリアと云ふ國では名も知れない象より大きい獸として夫々地震の原因を拵へて置きます、中で龜などは誠に能い思ひ付き天晴れなる御料見と恐縮致す外ありません、是れよりもをッとこみいッた言ひ傳へのあるのはカムチャッカです、御存じも御坐いましやうがカムチャッカと云ふ國は北海道の北、千島より嶋續きに成ッて居る寒い國です、此國の人が云ふのにはナユイルとか申す神樣があつて文珠樣が牛を連れて居なさる樣にナユイル樣は犬を連れて居なさるが此犬が蚤か虱の樣な虫にいぢめらるゝと足で搔いたり口で咬んだり身振いしたりなにかすると地震が起るのぢや、斯ふ申します、また面白いのはスカンヂナビヤです、スカンヂナビヤは歐羅巴の北瑞典と那威との地面一体を云ひますが、此國の北方の土人は誠に所作のある面白いことを云つて居ます、此國にはロキとか申す惡神がありて其弟バルドヴヰンとか申す神を罪もないに殺した罰として仰け樣に大きい岩石の上に結りつけられ始終其面の上に蛇の毒液を落され居るが夫を思ふ妻の

情、ロキの妻は見るに見かねて大きい鉢を持ちて上から滴り落る毒液を受け止めて居るが、限りある鉢なれば限りなく落ち來る液にて時々充滿し之を何處にかあけ來る間に二、三滴の液面上に落つる途端にロキの苦み甚だしく縛られ乍ら四轉八倒するより遂に地震が起ると申します、私が若しロキの妻であつたならどうにかこうにかして其繩を解いて自由の身となし其罪を詫びさせましやうがそうすると世界總潰れになる樣な大地震がおこりましやうし、ロキの妻たるもの夫を想ひ國を思ふの情誠に以ていぢらしき事で御坐います

前申し述べましたる通り所々方々の國々を探したら此の外尙面白い言ひ傳へもでさんしやうが今は只私の覺えて居る事ばかしを御意得まして其餘は取調ぶるに至りませんでした、大概是れにて昔しの人又は開けない處の人は地震に就いてどんな考へを持つて居るかゞ判ります、彼の地震を以て有名なるジャワ國などにては地震を神の業とし人が犯せる罪惡を懲さんが爲地下に此刑罰を與ふるものと考へまして、地震の度毎に山に驅け登つて天に向つて慚悔し祈禱し人民一般が恰度神事の場に行つた樣に靜肅端坐して偏に赦免を祈るに餘念がないと申します

夫れから少し開け始めてからは地震をば地中に籠り居る風氣の働きとしました、言葉を換へて申せば地中に幾つもの穴がある、其穴の中には乾度風氣が籠つて居るに違いない、其風氣が熱又は其他の働きにて地上に風が吹きすさむ樣に地中に吹きすさみて地震を生ずると斯ふ申しました、其の他地中に流通する電氣の働きより起るものがあると申す議論も御座りましたが、學者達が種々の試驗にて電氣の爲めに地震が起るのではなく地震の爲めに電氣が起ることがあるのぢやと云ふことです

去らば地震は勿論地下に住んで居る動物の働ではなく又神樣の仕業でもなく風氣の働きでもなく電氣の爲めでもないとすればハテ地震は何の爲めに起るのでしやう、少し堅くるしい御話しに亘りますが天上に起る地震ではなく地下より響く地震で御坐りますれば地下はどんなふうに組み立てられて居るものかを先づ取調べなければ地震の本家は判りかぬる次第で此處に一寸

土中の有樣

を御意に入れましやう、世界は鉄砲の玉の樣に丸く堅いものではなく、丁度卵の樣に外は硬く見えても中は全く軟かなもので御坐います、其卵子の殼の上に吾々は住んでるもので、誠に危險至極のもので御坐います、されば或人は斯く申しました世界が若しひいどろ細工のもので中が皆な透きとふつて見えたなら一日も安穩に住んで居ることは出來まいと、實に其の通りで中は只軟かいばかりでなく、非常に熱し居りて軟かいのは即ち石や金屬とけ

でとろけて居るからです、斯う申したら貴樣は嘘ばつかり云ふ奴ぢや此世界は卵の樣ぢやのとろ〳〵の樣ぢやのと夫れを貴樣はどうして見たと御叱りになる方も御座んしやうが果を見て因を押すトンナンカントンナンカンと云ふ音によりてあれは鍛冶屋ぢやと云ふことが判りますれば地上に現はる〳〵果を見て地下の組み立てらる〳〵因を考へることが出來るのです、火山と申して火を吹く山が御座んしやう、あの有名な淺間ケ嶽が火を吹いた時ヲバと申して石と金との解けた液を七里下に流したと云ふことが御座いさす又所々に在る湯治場よりは熱い湯を沸き出します、若し地下が熱くなかつたなら此んな熱い湯を出す道理は御座んすまい、或る學者の算用に依りますと地下を堀ること四、五十尺毎に必ず華氏の寒暖計一度の熱さを增す、こゝからはぢき出せば三、四里下は石も金も溶ける熱度に達すると申します、斯くの次第で御座りますれば、吾々は二、三里厚い殼から出來て居る大きな卵の上に住んでるものと申しても不都合はありますまい、危きこと累卵の如しと申しますが、誠に吾々は危い生活をして居るもので御座います、そうして其殼はひゞかいつて居つたりでくぼくがあつたり危險な上に危險なもので御座んます、して日本などは殊に殼即ち地磐の散々危ない所に立つて居まして、外國より態々地震を調べに五年も十年も來て居るものがあるのは斯の爲めです、學者と云ふものは物好きなもので地震を調べると云つて萬里の異國に永年滯在したり空中に何れ程高く上つたら死ぬだらうと云つて風船に乘つて五里も十里も上り呼吸が止つて死に損ひになつて下りて來たり、一寸思へば氣狂ひぢみて居りますが、斯うでなくては人智が開けて來ないです、二人を苦めて萬人の爲めにするのは學者の本分で、平生は只穀潰しなど腐れ儒者など實業仲間から笑はれて居りますが、敬すべきは學者に相違御座いません、電信を工面したのも學者で鉄道を考へ出したのも學者で虎列刺豫防を考へたも學者で御座いまして當時は學者達が集まりまして地震豫防を調べて居ります、地震を豫防することを考へ出されたなら何れ程功德になりますか、一日も早く其筋道の就くのを願ふのです」話しが横道に這りまして恐入りました、是れから肝甚の

地震の原因

を申し述べましやう、學者の申しますには地震の原因は中々六ケ敷が先づ三種に成る一つは火山が噴火したり又は爆裂したりするときに起る火山地震、一つは地中に在る石灰や石膏などか水の爲めに融けて大きな穴があきとう〳〵地面を押へることが出來なくなつてどんと一部が落こちる時に起る陷落地震、一つは種々樣々に入り交つて居りまする地下の磐石が其續き目に於てずつと辷ることある時に起る地辷地震と斯う云ひます、偖て

今度の地震

は此中の何れかと申しますと、人は始めに鳥海山噴火など申しましたが其後の調べに依りますれば鳥海山には異狀は御坐いませんから噴火に依つて起つたものでないことは云はなくつても宜敷ふ御坐います、去れど山の噴火でなく矢張火山作用と申しますが、地中の割れ目より水が流れ込みて中の熱い岩や金に落ちると鉄瓶を火鉢にひつくり返へした樣に恐ろしい勢ひにて灰かぐらではない土かぐらを上ぐる其時に起る地震も御坐いますが今度の地震は何處からも著しく蒸氣を噴き出したものもありませんし私は此類の地震でないと判斷しました、然らば陷落地震かと取り調べますと、其震害區域の狹少なる處から云へば或は似た處も御座いますが陷落地震とすれば必ず其中心點に廣大なる陷落地がなければなりません、調べに依りますと飯盛山は二丈三尺低くなり、又黑森及坂野邊の山中二箇所に長さ各九三百間巾四、五十間の處殆と三丈程低下せし現象も御座いますれど其西方僅か二十町計りを隔つる十里塚濱中等は却つて其南方二、三里の押切界涯より弱いを見ますれば石灰又は石膏層の陷落より生じたものとも思へませんし殊に今度の震害の甚だしき地區は所謂水成岩より成れる近古紀層と後近古紀層との間に起れるを見ましても決して陷落地震でないことは斷言致されます、概して莊内の地の一番早く地形をなした處は國の東南隅即ち東西田川の南より東の隅にかけて朝日嶽の邊りにて夫れから段々四方の山が出來陸が出來たのです、かの吹浦の山なり清川の山なり田川の山なり加茂の山なりを見て御覽なさい、其山の切り拔いた處又は頽れた處を見まするに、態と積み上げた樣に層々重なつて種々の切り餅を重ねた樣です、是れは水成岩と云つて水の力で出來た岩だと申します、即ち水の流れが持つて來る種々の土が段々に層り合つて斯の樣に成つたものです、鳥海山は此後に噴き出したものに違いない、即ち鳥海山の地質より申しますれば新火成岩です、皆樣一寸火箸かなにかで卵の殼をつツついて御覽なさい、其つツついた處は高くなつて其四方は散々にひゞがよりましやう、今度地震を最も強く感じた處は四方の水成岩が出來た後に出來た沖積層と云ふ極めて輕鬆地質です、此土地の下には必ずや鳥海山が出來た時のひゞが澤山あると存じます、故に私は今度の地震を以て

狹少なる地辺りの結果

と存じます、其地震區域の狹きと上下に搖れた地方が僅か五、六里四方なりとに依りて地辺りの起つた處は地下餘り深い處ではないと判斷しました、或學者は日本海中の地辺りなりと申されるそうです、成る程日本海は西に向つて段々深く一番深い處は滿州近くに在つて日本海底は脆弱で時々地震の源となり、殊に奥羽の地は東はトスカロラとか申して世界中最も深い海に沿い西は前申し上げました通りなれば日本中にて地盤の最も傾き居る處に

相違御座いますまいが、若し日本海中に起つた地辷りとせば飛嶋が何んの爲めに微震位いに止まりましたらう、海底の大震と致しますれば何の爲めに激浪ぢ來なかつたでしやう十里塚濱中湯野濱加茂邊は何が故に黑森坂野邊大山邊より弱かつたでしやう、私は斷じて日本海中に起つたものではなく、莊内沖積層の地下に起つた狹少なる地辷りの結果と確信致します

地震に前兆ありや

と或人が私に問ひました、私は大に答へに苦みます、なぜかと申せば前兆のあることもありないこともあり、又地震の前兆かと思ふとそうでないことも度々あるからです、海水が減じ井戸水が乾き川水が引くことは今迄の例に見ますと度々ありますが、去らば海水河水井水が無くなつたから何んでも地震が來るかと云へばそうぢやあ御坐いません、此度も天氣は數日間照り續き河水が引き井戸水が乾き海水が少なくなりました、是れを地震の前兆かと云へばそうぢやと云つてもよう御坐います、前兆でないかと云へばそうぢやと云つてもよう御座います、此の外鳥が鳴くの天が澄むのと云ふのも矢張り此通りです、申さば日本は地震國でありながら地震に就きては甚だ研究が積みませんです、地震も天氣の樣に明日は雨だとか風だとかを豫め測り得れば夫々用意も御座んしやうぢ未だ地震の前兆と云ふべき程の前兆は判りません、或人は地震が來る前にはぐう〳〵と地鳴りがすると申しますが、是れは地震が來る前ではなく地震と共に起るのです、地中の土や石やが凹みに落ちたり又は磨れ合つたり又は地上の木や竹やが觸れたりなにかするから響きが起るので響きの傳はることは動きの傳はるより早いから響いた後に動く樣に思はれますので全くは響きも動きも同時なのです併し響きが有つても動きが來ないことの有ることもあります、又或人は土地の割れ目から

火が燃ふることありや

と問ひますた、時としてはあるのです、即ち地震と共に起る電氣の働きにて地の割隙より電光の如きものを發するのです、今度の地震に就きて人が盛に傳へますには船場町の邊りと坂野邊の邊りとよりは地の割れ目より燐火の如きをトロ〳〵と燃ゆ出せしと、受け合ひかぬる話しです、凡て人は恐しいことに遇へば其恐しいことを一層恐しくなさうとて種々の所作をつけたいのは人情の弱點です、故に段々問ひ糺しますと其手續きに閉口するのです、現に坂野邊の方の抔は巡査樣に問ひ詰めて貰つたら一向に曖昧なることで御座いました、恐らく船場町の方も亦左樣で御座んませう、去らば

硫黃の臭ひがすることありや

と段々深く問ひつめられました、而うして或人の云ふのには宮野浦邊にては地の割目よりは可笑しい臭ひがして丁度硫黄の臭ひの樣であつたとあの邊にて一般の評判ぢやと斯ふ申します、夫れ故私は彼處を巡視致しました時に種々樣々に問ひ糺しましたに判然と硫黄の臭ひとは斷言致しませんでした、只硫黄らしい臭ひであつたと云ふことです、夫れから噴出した泥や砂に就いて種々と研究致しましたが硫黄の氣などは毛頭無かつたのです、凡て土中殊に沖積層の土中には動植物の腐敗や硫酸其他の酸類や硫化水素氣などを含んで居るものです、是れが臭つたので單に硫黄と申したのは地震は何んでも火山に關係あるものとばし思つた人の口から出來ることと、存ずる外ありません、私は斷言しても差支へありません、地辷り地震には決して硫黄の氣を出すことなどはないものだと、又或人は頻りに

地割れの方向

を取調べて居られましゝ、私は何んの爲めに地割れの方向などを取調ぶるのぢやと申しましゝさら、此方向を取り調べて震動の方向を調ぶるの種とするのぢやと、成る程一寸思ひつきなれど是れも何んにもならないのです、上下動を最も劇しく感せし强震部にはつまり震動の方向はないと云つても可ありお程で、上下左右四方八面に搖れ動くのは通例です、而うして地割れは主もに土地の弱く軟かお方に向つて筋をおして居ります、故に船場町の地割れは最上川に向つて東西と筋をおし、黑森の地割れは赤川に沿ふて南北と筋をおして山の谷間おどに這入つて見れば谷の低い方に向つて四方より龜裂が出來て居ます黑森の或家の庭おどは龜の甲の樣に四方八面に見事に割れて居りました、物の倒れゝ方向も亦劇震部には此通りでつまり其方向は無いもので地足の柔かお方に向つて倒れて居ります、酒田は主に南北と倒れ黑森は主に東と倒れて居ります、併し劇震部より段々遠方と此倒潰の方向を取り糺して行きますと、つまり一致の方向を現はして幾分か地震の中心と云ふが如き處を見出すことの出來る事もおいとは限りません、即ち大山以南は北々東に向つて倒れて居るが多く、藤嶋以南は北々西に向つて倒れて居るが多く、酒田以北は南に向つて倒れて居るものが多いから其線を引き延して見ると丁度最上川と赤川と相遇ふ邊に會するので若し地震の中心と名くべき處に當るべき場所即ち地辷りの最も劇しい場所を知らうと思はゞ是れにて詰り造作もなく判ることが御座います、或人は又

水を噴き出す理屈

は何うだと問ひましゝ、偖ても私は學者おつて餘りしやべくり廻りてとんな災難に遇ひます、私は學者でもなんでもなければそうゝは問ひに御答ひ申すことは出來ず、殊には前々にも申し述べましたるとうり、地震に就きては學者達も今が研究中にて未だゝ判らな

いことが澤山と御座いますれば皆なが皆な御答へ申すの限りでは御座いませんが、よしつまり自分も調べる氣になつゐもの何んでも御問ひなさい出來得る限りは御答申し行きつまつゐ時は一層のお慰み、去らば益々學者氣取りになつて是れより言上つかまつらんェヘン」

押も噴水の理屈と云つは皆樣とつくに御存知の通り地下に水脈と申すが御座いまして堀拔井又は只の井戸水も此水脈より汲み上るのです、然るに地震によりて或は非常に低くなつた處もあり又非常に高くなつた處もあり地足が堅くなつたり弱くなつたりして水脈に異常を生じ又は水脈が押しつけられて噴き出すのです、船場町の如きは此水が三、四尺の深さにて街道を押し流し高野濱の如きは家の地盤から二間四方位の廣さにて一丈ばかりも高く凄まじい勢いで噴き出したから堪らない其家は散々に飛びかへつて仕舞ひ其水が人の腰を沒する位ゐに下手に流れ行つたと申します、坂野邊宮野浦の邊りの砂地には水の噴き出したる穴が何百千か數限りもなく御坐います、此邊には地割れより噴き出した計りでなく砂地だもんですから別に穴を堀つて丁度摺鉢の樣な工合になつて噴き出した跡が歷々と御座います、而うして宮野浦邊より砂越邊にかけて所々にヨリ木と申しまして水の流れにて河邊によつた樣な木が吹き上げつて居るのを見ます、是れは明かに此界涯の固とは河であつたを證據立てる屈竟の材料で御座います、或人は又

地震は何時已むものか

と問はれました、誠に六敷問ひで判然と答ゑは致されません恐らく一ヶ月餘もたつたら已むだらうと申す外ないのです、併し劇震は此後にないとは斷言しても宜敷ふ御座います、何故かと申せば一度地層はどんと辷つて落ちつく處に落ち付いたものであれば夫れに次いで少さい辷りが時々あるは丁度高い山より大きい石を落す時にごろ〳〵〳〵と石についで土や礫などが落つることありとするも決して大きん辷りが無いのです、莊内地方に地震計が御座いますれば大震後の震動等を精密に調べることも出來ますれど夫れが無いから仕方が御座いません、只人身に感じた震動のみを調べました、此外に洩れたものもございませうし、又只地震だと思つたばかしものもございませうが、先づ參考として下に出しました

十月廿二日　午后五時卅七分頃大激震五七分間、續て激震、引續き三回激震あり　午后十一時四十分迄震動二十四回初めより二十九回なり　午后十二時強震　午前一時廿五分輕震　午前〇時五十五分強震　同　三時二十分輕震　同一時五分輕震　同四時卅五分強震　同一時廿分輕震　都合三十五回

一寸申し上げます固と此調べはそら地震又地震と皆々安き思ひも致さん中に隙を嫌んで書きしるしたものでご御座いますれば激震と云つたり強震と云つたり輕震と云つたり種々の名をつけ後では又弱震と云ふも出ました今から見れば不都合千萬で御座いますれど矢張り其儘に致して直さずに書き上げました又午前午後の區別も其通りで廿二日の午後十二時以後

は二十三日の午前になる譯ですが是れも矢張り廿二日午前として書き出して置きました、直しません其當時の有の儘です、皆樣はたゝ前後の振り合ひを御覽に成つて正當の判斷をつけて下さい、當時の人の心はみんなこんなものだと御推察下さるの好い雛形と存じます

以下も其通り

十月廿三日　午前七時頃强震　午後一時より同十二時迄强、一回輕四回　同七時頃迄强、輕二回　正午十二時迄弱震一回　都合八回

十月廿四日　午前五時迄六回弱　午前五時より午后六時迄六回弱　都合十二回

此頃濱邊地方では激浪が來るとかと云つて大騷ぎをなし又內地では大地震が來る抔唱へて人心愈々洶々たりと云ふべき程で御坐いました

十月廿五日　午前五時より午後六時迄五回弱夜二回弱　都合七回

十月廿六日　午前八時四十五分まで三回弱　同九時四十分强一回　午後〇時五十分迄二回弱　都合八回

十月廿七日　午前わは二回弱　午後十時二十分弱　午前二時頃弱　都合四回

十月廿八日　午前午後二回弱　午前三時頃弱　午後十一時十分强四、五分間位　午前〇時七分强二分間位　都合五回

十月廿九日　午後三時二十分弱　夜二回弱　都合三回

恐れる時は何處までも恐るゝもので自ら恐るゝ種を造つて恐れて居ります誠に憫然な話、人が何と云つても耳にかけるものぢやあ御座いません、大地震より一週間になつたから又大きいやつか來るだらうと云つてビク〳〵したのは此頃です巫にきゝ佛によせて何時迄要心せいと云はれた抔と少し心が隙になつたから種々の材料を造り出したのも亦此頃です

十月三十日　午前午後二回弱　夜一回弱　都合三回

十月卅一日　午後四時迄輕震二回　午後十時三十分强　都合三回

十一月一日　午前四時頃弱　都合一回

十一月二日　午前四時三十分强　午後四時二十分大强三、午後一時四十分大强二、四分間　三分間　夜二回弱　都合五回

十一月三日　午前四時四十分頃强　夜に至りて午前一時二十分弱　都合二回

憫むべき哉、何時もにすれば此日は　天長の住節且つは皇軍頻りに支那の國境を踏み荒し向ふ所敵なく九連城略取の報さへ傳へられましたが祝ふべき心さへなく只管身の覺悟に餘念御座いませんでした

十一月四日　弱震一回　都合一回

十一月五日　此夜三回の弱震あり　都合三回

十一月六日　午後二時十五分弱震　都合一回

十一月七日　午前四時四十分頃輕　午後七時八分弱　夜二回の弱　都合四回

天も亦無殘なる事ばかし、酒田地方雨甚しく僅に出來たる假小舍は內に傘をさして居ねば

ならぬ悶れ至極の体なる上に雷さへ轟き渡つて天地も裂けんかと思はるゝ計り、山居稲荷の旗竿に落ちて中程より折つて仕舞ひました

十一月八日　午前四時卅分弱　午後八時強　夜二回弱　都合四回

十一月九日　一回弱　都合一回

十一月十日　強一回　弱一回　都合二回

十一月十一日　一回輕　都合一回

十一月十三日　夜一回弱　都合一回

十二日は御座りませんでした十三日は雨と共に風が烈しく吹き荒みて警報さへ發せられ日和山の上に赤玉が下げられたれば人々又かと恐れ出し天氣の警報と地震の警報とをでつたませにして騒ぎ出したれば飽海郡役所では所々に掲示を出して天氣の警報を地震の警報と見誤るなと注意した位、どれ程人の心が恐れにうたれ居るかを考へて下さい、して又此日の風は漸やつとかけたてた假小屋を吹き飛ばして簑蓆の様なものは電信の針金にひつかゝつた位、併し地震は段々と薄くなつて翌十四日は一回も感じません

十一月十五日　午前七時十五分強　都合一回

此日迄しか調べません今後も亦時々搖れませう、併し最早餘程下火になりました、初めより此日迄二十五日間震動の度數は都合百十五回です

儲て前々迄は兎角理屈がましい事ばつかり申し述べまして誠に濟みませんでした是れから追々地震の實況を御意得ませう

地震の當日

即ち明治二十七年十月二十二日は朝の内は晴れて居りましたが、午後よりは段々曇り出して天氣も滅切りと寒くなつた様に思ひました、そうして四時頃よりは雨も降り出して來まして外に何にも變ッた事は御坐いませんでしたが、五時三十分と覺しき頃どう〳〵と遠ふ雷がとゞろく様な音がするぞと思ふまにもつくり下たより三、四尺も上げられたと思ふとどんと落されて大概の家は是れと共に潰されて仕舞ひました、それだから潰れた家を見ますとみんなぴしやつと其場所に押し潰された様に左右に搖れて潰れたものなどは一向に見當りません、中には柱が四、五尺も土の中にさゝり込んで潰れて居るのも御座いますし家の半分が礎の土が四、五尺も上ッた處も御座います、して丁度火燈し頃で御坐いますれば潰れると同時に火事が出來て僅か十分間も經たぬ内に十五、六ヶ處の火の手で御坐いました、物凄いつたら申さう様の無い程です、老幼男女の泣き叫ぶ音耳に染みつくばかり、足をはさまれながら燒け死んだものもでざんせうし、そのうへ水が噴き出したものですから

黒森、坂野邊、船場町邊では水の爲めに死んだものもでざんせうし、或る人の如きは龜裂の中にはまり込んでワイ〳〵叫んで居るものも有つたと云ひ（黒森巡査の話）其混亂慘狀實に御話し申すに術は御座いません、宅より逃げ出そうと思へば戸が明かずして狼狽へ廻るものもあれば戸の外れた勢ひに投げ出されたものも御座います、兒は親を呼び、妻は夫に縋りて四轉八倒漸くに免れ出しかと思へば水にせめられ火に苦められ殊に難儀に遇ひましたは酒田の船場町、高野濱及、黒森、新堀等で御座います、押切、廣野、松嶺、飛島、砂越の所々も家は大半潰れ、又火事の出た所も御座いますれど幸に火、水の責めが大きくなかつたものですから其損害も亦大きくは御座りませんでした、

十里塚の船子が話

には此時丁度沖に肴取りに出て居ッたが妙な音がすると一處に酒田の所々方々から火の手が上つたもんですから何んだか一向に解せなくつて居つたが、見れば最上河の水戸口に蒸滊が一艘浮んで居るし段々種々に考へて見れば近頃支那との戰爭が始まつてるそうだ、是れはてつきり支那の軍艦が行て酒田を砲擊したに相違ない、左すれば己れの村も危險だ早く歸つて夫々仕托をせにやならぬと網糸などを其儘にし早々に歸つて見れば地震とのことと何んだかあつけに取られた樣なれど、成る程、地震とは知らなかつたら一時に數ヶ所に燃

ゐ上りし火の手、支那船の砲擊と見たも無理では御坐いません又

大山の行商の話

に依れば當日此人は田川地方に商ひに行き白山より車を曳いて堰傳ひに山田の方にさかゝると可笑な調子に躰がゆら〳〵し車も何處となく重くなッたのみならず、幾ら曳うと思ッても曳けず、此近所に狐めが出ていたづらすると聞き居ッたが、きッと彼奴に違いない、どうして畜生如きに負けるもんかと一生懸命にひき居る内、田や堰の水ががぼ〳〵と動き出す畜生未だたます氣かと益々あせれば遙か北の方にドン〳〵と火の手が上る五月蠅い事を仕上るなと猛り狂ひ汗水たらして大山に着けば皆ながら外に出て大騷ぎ、去れど尙地震だとは思へなかッたと前と一對の御話、誠に左もあるべきことで御座います、どうして

此晩

は寢る處ぢやあ御座いません、私の宅は大山で餘り劇しい地震でも無かつたが土藏の潰れ建具の痛みは又大層で御座います、私は此時鶴岡より用を達して大山に歸り道、車の上で地震に遇ッゐんですが、隨分酷い地震ぢやと感じた計り一寸車を止めさせた位るで大山に這ッて見れはみんな大道に板子や連臺を置いて其上に立ッて居る此方は車で驅けて行ッたもんだから何だ此畜生此地震に車でなの通りあがッてと叱られ恐縮して宅に歸ッて見れは

戸口は痛み女どもは大騒ぎ戸障子と云ふはみんな外れ又は折れ出入りの若者が來て後ろに避難所を設け居る眞最中、騒いだッて仕方が無いぢやないかと云ッても聞かず、先づそこらぢうをすこし取片附け食事を濟し酒を少しきこしめして家族は殘らず避難所に遣り自分は布團を被ッて座敷中に寢て居ッたが女共に搖り起され未だ地震が止みもせぬに危ないから外に出ろと云ふ、あと決して大きいのは來ないと云ッてもそんなことを云ッてるときめつけられ此晩は只私の宅ばかりではなく總ての家では皆な外にて夜を明しました、殊に酒田にては地震ばかりでなく火事が中々止まず、固より何處とも消し手は無いから燃ふる丈け盛んに燃へたもんですから、多くは寺屋敷に難を避け家は天任せ黒森も其通り背ろの竹藪に皆集まッたと申します、殊に憫れなのは

迷兒

で、家が燒ける親が見ない、先づ家からは飛び出しては見たものゝ方角が知れず、況して恐ろしい勢ひで燃ゆる來る火に捲られて右往左往に驅け廻りとッちやんかあちやんと聲を限りに泣き叫べど答ふる人もあらばこそです、たまさか道行く人に取り縋れば此餓鬼めとおどしつけられ、途方に迷ひて彷徨ひ居る迷兒は酒田にては尠からず、巡査が夫々介抱して寺屋敷に連れ行けど尙ほ母を慕ひ父を呼びて其可哀さ覺ゆ袖をしぼる計りでありました

たと

翌日

の酒田は大抵火は燃ゆきれましたがいろは四十八庫の米などは未だ燒けて居る時々下の方から數十百人が人涙みうッてうら又くる今度は激涙ぢやなど老幼男女入り交ッて驅け來りザヾ山に登り上る皆な夫れについて追ッかけ行く、何と申せばよいか誠に殘忍至極混雜千萬にて最早自分の躰の外、何にもいらない氣組みで騒ぎ立てる有樣は凄まじいと申せばよいかすでいと云へばよいか恐ろしいと云へばよいか謂ふべき言葉は御座いませんでしたとさ、鶴岡、大山、藤嶋、清川邊も山鳴りがするの何時頃又來るとの警報があッさ抔と無暗矢鱈に風說を傳へて家に安居するものとて無く殊に黒森等の火事のあッさ處では炊出しをなすにも清水はなく泥水を鍋に入れて漸く粥を拵へさりと强震部にては、此樣の有樣十日も續き其内段々日用の雜具飲食物等を喜捨するものが出來て鶴岡、大山邊よりは船にてどん〳〵運ぶお手便に至りましされば先づ一時の口はそでされあのです

御話し申せば種は中々盡きませんで、餘は大概省くことに致して以下

慘況中の慘況

をちよく〳〵御話し申しませう

不思議なのは本間樣のゐろは庫です新井田川の西岸に四十八箇所並んで居ッて近頃は船もあんまり來ないから米も澤山這ッて居つたが何處から火がつゐたか燃ゑ出すと今度はいつかな消へず移り〳〵て四十八ともみんな落ちて火は二、三日間消ゑず、黑燒けの米でさへ尙四、五拾錢で買ふものありました

可哀そうなのは袖浦役場の書記高橋某の妻女です、某は此日當直に當つたから、宅に歸ッて夕飯を濟し役場に行つて煙草一吹吸ふか吸はぬ中に大地震、役場の方をば他人に賴んで宅に歸れば既に丸燒けと成つて仕舞つた後、長女がたッた一人でたッきりにて泣きながら某に向ひかゝさんは走り出しましたが落ち來る軒に敷かれ妾しが一生懸命に引き出さうとしましたが腰を强く挾まれたもの遂に力が叶はず誰れかと思ふ內に隣りから出た火がどん〳〵と燃ゑかゝり哀れやかゝさんは己れは燒け死ぬのかと仰しやつたつきり……弟も其通りと

無殘なのは白崎太物店の主人、此日何か法會があつて客來多いため洋燈も澤山つけてあつたが先づ店の方が潰れると後の方よりは火が出でゝ進退維れ谷まり此店ばかりて死んだものは九人あるが主人は小兒を脇きに抱へたまゝ漸と外にかけ出したが、どちらも火なれば先づ船場町の方に行つたらしいが此處は何處よりも烈しい場所、取つてかへしに本町の方

酒田出町

酒田出町伊達の写真図より模写

酒田櫻小路失の写真図より模写

酒田櫻小路

柚浦役場の見取図

全部大損害を蒙れり

しかるに此の辺の家屋は地震の為めに

ずつぶれたのみにて家屋は地震の為

倒れ崩れ地は悉皆焼き拂はれて

残るものは役場のみ此等にて

判け難し

一望荒野の如くに点々破壊したる土

蔵の存するを見るのみ是等乃

工蔵も大概中に燃え入りれたれば

鎮火後倒潰せしもの尠からず

方の垣は中部より

たるのみならず

入りちかひて殆と

咬ひちがひを生じて

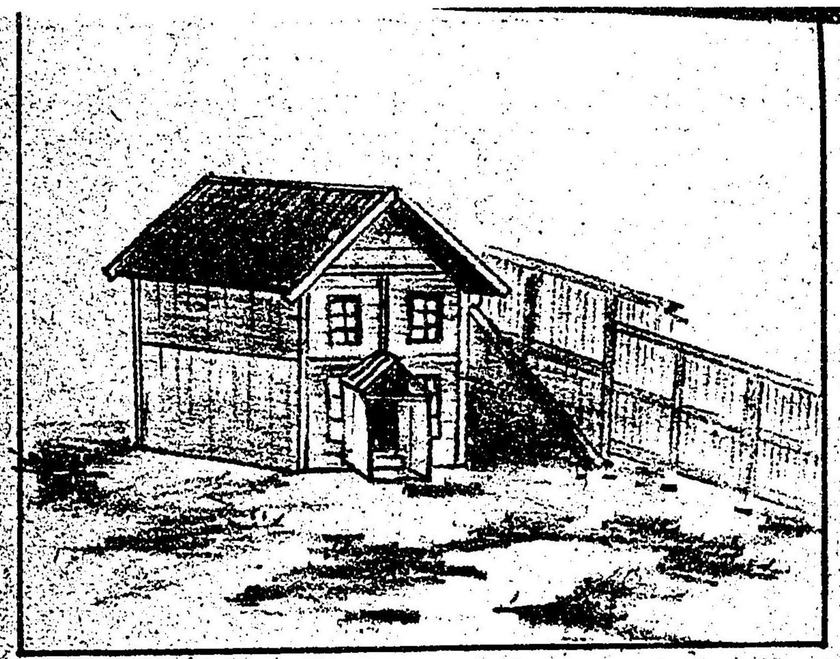
依て思ふに此地は

方より互に壓迫

場は幸ひにも其

免れしにあらさる

の考ふへき處なし



黒森役場即袖浦村役場

袖浦役場の見取圖にして黒森
全部大振宝造りの中に役
場のみ此等に比べ見るに右
方の垣は中部より切断せられ
たるのみならず下部と上部と
入りちがひて殆と二尺ばかりの
咬ひちがひを生じて重なり合へり
依て思ふに此地は上方より下
方へ向て圧迫せられたまへば役
場は幸ひにも其上に立ちて難を
免れしにあらざるかと蓋し識者
の考ふべき處ならん

に向ても是れ亦面も當られぬ火の手、自分の宅の傳馬町の方は最早散々の火事、益窮して米商會社の地内にかけ込むと大きい瓶が伏さッてある、よもや此瓶に脱れて助かる氣ではなかつゐでせうが、小兒を連れて居るから若しもと思ッて瓶の中に這入ると最後、米商會社も燒けとう〳〵瓶の中で蒸し燒きになりました、誠に無殘な最後、是れと同じく瓶に這つて死んだもの都合七人ありました

氣の毒なは所々の土藏です、地震で搖られて壁が落された上に火がかゝつて來たからたまらない、ぱたり〳〵と燒け落ちて哀れや財貨珍寶一朝に烏有となつて仕舞ひました

狼狽たへきつたと思はるゝは酒田の柳小路の堰に落ちて死んだ人です、あのちつぽけな堰におつこちたといつて上るに造作もないこと、去れど火が四方からかゝッてくる堰の中をあッちこッちとかけ廻ッたが遂にあがれず、つまりは其の中で死に果てました

惜しい事なは武田村の或るおばあさんで、自分の子が死んだと聞いてのぼせあがッて死んで仕舞いましたが、後できけば自分の子は吉之助と云ふが鐵之助と云ふものが死んだと云ふを誤り傳へて吉が死んだことゝぱし信じ遂に此最後、餘り早まりすぎて誠に氣の毒な譯で御坐います

前申しました樣な無殘なお話しは至る所に御坐います、到底一席や二席で述べ盡しかねま

すが、今は只其中の種々を申し上げた計りです、是れが一番無殘ぢや云ふ譯では御坐いません、こんなのもありこんなのもあると云ふを御意に入れたばかりで餘はよろしく御推もじを願いまして次に

震害の統計

を御耳に達しませう、此の統計とて中々正確なものは六敷いのです、なぜかと申せば破壞家屋と云つてもどれ程のものを算用すればよいか、又死んだか生きたか行衛の知れぬ人も今であるからです、併し大數は變しますまいからよろしく御洞察を願ひます先づ

飽海郡

から出しました

町村名	全戸數	全燒戸	全潰戸	半潰戸	破壞戸	死人	負傷者
酒田	三、四六〇	一、七四七	二四〇	九三	三二九	一六二	二二三
松嶺	四三〇	一七二	三九四	二一七	四一	一五	一三三
上郷	三九二	〇	三八	六五	二〇一	三	三
内郷	三六二	一七	一六七	一二一	四〇五	四七	四五
田澤	四九七	〇	三	一〇	四八〇	〇	〇
南平田	五四二	二四	四七〇	四〇七	四四三	八六	六〇
東平田	四二二	八	五四	五一	四一四	一〇	一七
北平田	三二九	七	五〇	一九	一七五	二〇	一一
中平田	四三一	一二	九八	三四	一〇四	二九	九
鵜渡川原	三六四	〇	一八	一〇	一二	七	一三
西平田	二〇五	五	六〇	二六	二〇三	二二	七
上田	三〇五	〇	三九	一五	三一五	三	三
本楯	四六三	一	三二	一六	一七八	六	二〇
一條	二四六	〇	六八	六〇	二六	一七	一
觀音寺	三七六	〇	四一	五八	四八八	四	三九
大澤	二二〇	〇	四	三六	二八五	一	一
日向	三〇三	〇	一〇	三〇	三九五	二	五
西荒瀬	五八九	〇	一七	四六	一四六	四	一
南遊佐	三一〇	〇	一七	一〇	一七	一	一
稻田	一八五	〇	四	一〇	二六	〇	〇
四遊佐	三九〇	一	五九	三九	九二	一	二
遊佐	四六一	一	五四	三三	一七四	九	九
蕨岡	四二〇	三	七四	二六	一二六	一六	六
川行	一七四	〇	一〇	九	二一	二	六

高瀬	三五二	三	八三	六九	一二三	四
吹浦	三一四	五	五一	七一	二四九	一
合計	三、五四二	二、〇〇六	二、一五五	一、五八一	五、五五八	四、八一一

六六一

全焼戸より破壊戸までは家屋ばかりではなく土蔵、小屋等をも一戸として調べ出しましたから却つて全戸數より多い數を現はし居るのです、即ち此表を御覽になつたら何處が一番惨狀を極め居るかを明かめることが出來ませう、是れからは

東田川郡

です、

町村名	潰家	半潰	焼失	負傷	死亡
藤嶋	二	七	〇	一	〇
八榮嶋	二〇	三六	〇	〇	二
東榮	一	三	〇	一	〇
渡前	〇	七	〇	〇	〇
大和	七〇	一四	〇	〇	四
狩川	〇	二	〇	〇	〇
十六合	三〇	二	三	〇	五
新堀	一二七	一六五	一二	二八	三五
廣野	一七九	一三	〇	〇	四九
余目	一七三	七五	七	五	二一
常萬	五五	四	〇	一	七
八重里	三二	一	一	二	四
長沼	一〇	一〇	〇	〇	〇
押切	一三三	三三	四	一九	二八
榮	九四	三七	八	二七	二二
合計	九二六	四〇九	三五	九〇	一七九

斯の樣な數字を現はして居りますれば東郡は北方に被害の多きことが判ります、今度は

西田川郡

を調べませう

町村	全戸數	全焼戸	半潰戸	破壊戸	死人	負傷者
黒森	一三五	七七	九六	三七	三〇	六八
坂野邊新田	六九	二	六四	九四	一七	一五
宮野浦	一七六	一	七八	三三	一六	一五
廣岡	二四	〇	五	五	〇	一
十里塚	八六	〇	二	〇	〇	〇

青山	七二	○	○	○	一○三	○	○
神花	六七	○	六	三	八九	○	○
猪ノ子	一三四	○	三	八	一五一	○	二
成田新田	八三	○	四	三	二一六	○	二
東沼	四○	○	四	一	五七	○	○
善阿彌	一七	○	○	○	二五	○	○
角田二口	二一	○	一	○	四九	○	○
馬町	一三五	○	○	一	二七	○	○
下川	一一五	○	○	○	三六	○	○
千安京田	一八	○	○	一	一	○	○
面野山	三八	○	○	○	一八	○	○
辻興屋	三七	○	○	○	八	○	○
西沼	二九	○	一	四	一○	○	○
茨新田	六五	○	○	四	七	○	○
長崎	四二	○	○	○	二一	○	○
加茂	四七○	○	○	○	二	○	○
湯野濱	一九九	○	○	○	○	○	二
大山	七○三	○	二	八	二九六	○	○
友江	二九	○	○	○	一四	○	○
中橋	二四	○	○	○	六	○	○
菱津	五六	○	○	○	三	○	○
下小中	五八	○	○	○	二二	○	○
下興屋	二○	○	○	○	一	○	○
豐田	二九	○	○	○	二	○	○
福田	二三	○	○	○	二	○	○
安丹	二四	○	○	○	六	○	○
林崎	二七	○	○	○	二	○	○
大寶寺	二一一	○	二	○	○	○	○
合計	三、二七七	八○	二八七	一三八	一、三五七	六三	一○五

御覧の通り或は字名に分けたり町村に分けたり種々雑多です、私は成るべく細かに調べて見ようと存じましたが調べの届かないのは仕方が御坐いません、だから細かに調べのついた処は細かなのを出し其の調べの雑駁なのは矢張其儘に雑駁です、併し皆様、是れ等家屋人畜等の損害が多いと云ッて強ち其地方が劇震ちやと申されませんのです、例を上げて申しますれば酒田の山の手の方は却ッて押切やなにかより震動が弱かッたらうと思はれますが火事が起ッたもんですから酒田の被害は誠に洪大になりました、羽黒の山上は却ッて手

向の村方より強かッたなど申しますれど只建物の損害ばかりを見て其建物はどんな風な建築方でどんな地處に建てられて居るかを調べんなら早急に此處は強い彼處は弱いとは斷言致されぬでせう、私は段々取調べまして一番の強震部は黑森界涯より砂越飛鳥にかけた一線と最上河と赤川の落合より赤川に沿ふて走りし一線とが一番強くあッたと斷言至します、故に若し中心点なるものを求めたなら必ずや此邊に有るだらうと存じます、併し之を以て必ずしも中心なりと云ふのぢやありません、地辷地震はなべて此處が中心との判斷が附けられんのです、若し日本海中に中心があるものとせば秋田の雄鹿半嶋より飛嶋にかけて越後にひきたる火山脈と鳥海山のある出羽山脈との間に起ッたもの、左すれば飛嶋の被害は隨分大なるものであらうと存じます、然るに實際其れに反對して居るから、私は實にずつと前に申し上げて置いた樣な判斷を下したのです、今

地形に及ぼしました被害

を取り調べますと西田川郡にては黑森より十里塚に參る地の山中と坂野邊より十里塚に參る山中とに長各凡三百間巾各凡四、五十間の處三丈餘も陷落したりと思はるゝ處と飯盛山の南西に二箇のつゝみ即ち田畑に灌漑の用水深さ凡六、七尺も有ッたものが持ち上げられて道と平らになッた處と坂野邊、宮野浦の邊幾百千となく噴水の凹穴を生じたとが最も主

もなるもので、東田川郡にては廣野押切の地多數の龜裂をおし巾五、六尺深さ一、二丈もあると思はるゝものが處々にあッて地盤一体に低くおッた樣に感じ飽海郡にては船場町の龜裂歛割生石の奥、高雄山の西南面二ケ所に巾二十間ばかり長八町餘の處が裂開して盛に泥水を噴き出したると飛鳥砂越の邊縱横に龜裂したる計りでなく平地が堤と等しき高さになッたとか最も主要おる變形と見ました、其他龜裂噴水は北鳥海山まで南、下川、鶴岡、藤嶋迄にも及びまして東松嶺おどは其被害も亦尠少では御坐ゐません

建物の被害

は建築家の宜敷注意すべき事と存じます、或る建築學士の申しますには一体莊内の建物は雪に堪ゆる樣に丈夫に出來て居るが地震に堪ゆるか否かは一向考へん、だから概して伽藍に損害が多いと申しました、成る程酒田の如きは廣大おる寺を以て有名お處で御坐いますが寺と云ふ寺は殆と皆倒れて仕拂い宮も亦大した破損です、然るに一向あやしげなほつた小屋の樣お風にも動くと云ふが却ッて無難です、故にボウトじめと申しまして上材木を省き鉄棒にて占めたものが存外震動に堪ゆる結果が歷々と御坐ゐます、又土代造りと申しまして柱根に材木をずつと這はせて拵つた家も比較して無難です、故に今の所では別に地震を防ぐの道がおゐから家造りを種々に取調ぶる外ないと申しまして地震豫防調査會では

主もに建築上のことを取調べて居ります、今度の震災に就きて東京より態々

調査に來られた學士達

は、田中館愛橘、小藤文二郎の二理學博士、辰野金吾、田邊朔郎、片山東熊、眞野文二の四工學博士、中村達太郎、曾根達三、野口孫市、塚本靖の四工學士及理學士大森房吉氏等で御座います、其他大學生等若干參りたれど大抵は工學に熱心して居る方々です、大森理學士の話しに依りますと今度の地震を明治二十四年十月の濃尾地震に比較して見れば酒田は名古屋より強く黑森は岐阜よりも強しと、恐しい事で御座ました、殊に

特筆大書すべきは

聖恩の無量なる、軍國多事の今日に於ても尙吾莊內人民の不幸を憫れみ玉ひ前に洪大なる御救恤金を賜はりたる計りでなく、實況視察として遙々と侍從東園基愛子爵を御遣はしに相成り親しく下民に就て實況を御下問せられしさへ感涙にむせぶ次第にて恐れ多い事と存ますのに　皇后陛下よりは負傷者の療養行き屆かないかを御意にかけられ電報にて醫者を御遣し下さるべきやの御下問が御座いましたそうですが是れは當節柄と云ひ又夫々山形地方よりも醫者が出張し吳れたといひ木下山形縣知事より立つて御辭退申上げ此事たけは御見合せになつたと申します、申すも畏い次第で御座いますれど　皇恩の無量なる此日本帝國內の臣民たるもの深く肝銘して子々孫々に迄も宜しく訓諭致すべき儀、特に莊內人たるもの此　御聖慮を末代迄も忘れては成りませんぞよ、

聖慮既に斯の如し、下萬衆も亦吾莊內罹災者を慰問し震災の實況を調査せんとて自由黨、財政革新黨、國民協會等の諸政黨よりも委員を派出しまし〻又最上地方よりは郡を代表して來〻方々もあつて莊內人も亦大に心を强くし〻ことは疑ひ御座いません、誠に皆樣の御親切は深く謝し奉る次第で御座います

救恤の事

は　兩陛下より四千圓の恩賜金が御座いまし〻計りでなく酒井伯爵殿や本間家其他よりは炊き出しを爲して窮民の糊口を助け又金湖、中村抔の人々は假小屋を立て〻雨露を凌ぐせ開業醫諸氏は治療をなし藥劑師は施藥を爲して一時を救ひし計りでなく所々方々より義捐金を送りて又救濟の資に供し、軍國多事の今日にても尙同胞相憐の情、誠に日本は末賴母敷御國で御座います

東西田川 飽海三郡　甲午大地震記　おしまい

附錄

震災に就き市井のくさ〻

震災後諸物價は一時に騰貴致しまして米五舛で壹圓だなどべら棒なお金を貪ッぬものが御座いますれはとう〻お上のお叱りを得てそれからは先づ平生にかへりました併し材木な

どの騰貴は免かれ得ません。車夫も亦滅法です、地震の當日は偖て置いて翌日翌々日の如きも鶴岡から酒田までの間何時もは四、五拾錢の賃錢で御座いますのに五圓も六圓も客次第で取りました。船場町が燒けたもんですから五十集物の火に這入ッたが少なく御座いません鹽鮭の燒け殘り抔は十里塚邊のものが買ッて行き一尾で五錢位いのもあつたそうです炊出しを受けて粥を貰ッたものも洪大で酒田ばかりの調べしか得ませなんたか酒井伯爵風間幸右衞門、池田藤八郎、本間光輝及飽海郡役所にて酒井伯は十月二十五日より十一月二日迄、風間氏は十一月三日より仝七日迄、池田氏は十一月八日より仝十三日まで本間氏及郡役所にては十月二十二日より十一月十二日まで惣救助人員九万七千二百四十五人此惣石數百七十七石二斗四舛五合で御座いましたと、尤も十月二十二日三、四日頃は何人來たか調べる處ぢやあなく大混雜を極めたそうです

酒田は柳小路を界として船場町より今町臺町等をかけて下内匠町下仲町五ノ丁六ノ丁迄悉皆燒失あとは殘つたと云ふものゝ内町の大部は燒け高野濱の一部又燒けて仕舞いましたから三が二は燒けたかと思はるゝ程です、そして燒け殘つたものも寺々はつぶれ警察學校裁判、議事堂などは皆大破又は倒潰致し到底役には立ちませんやうです

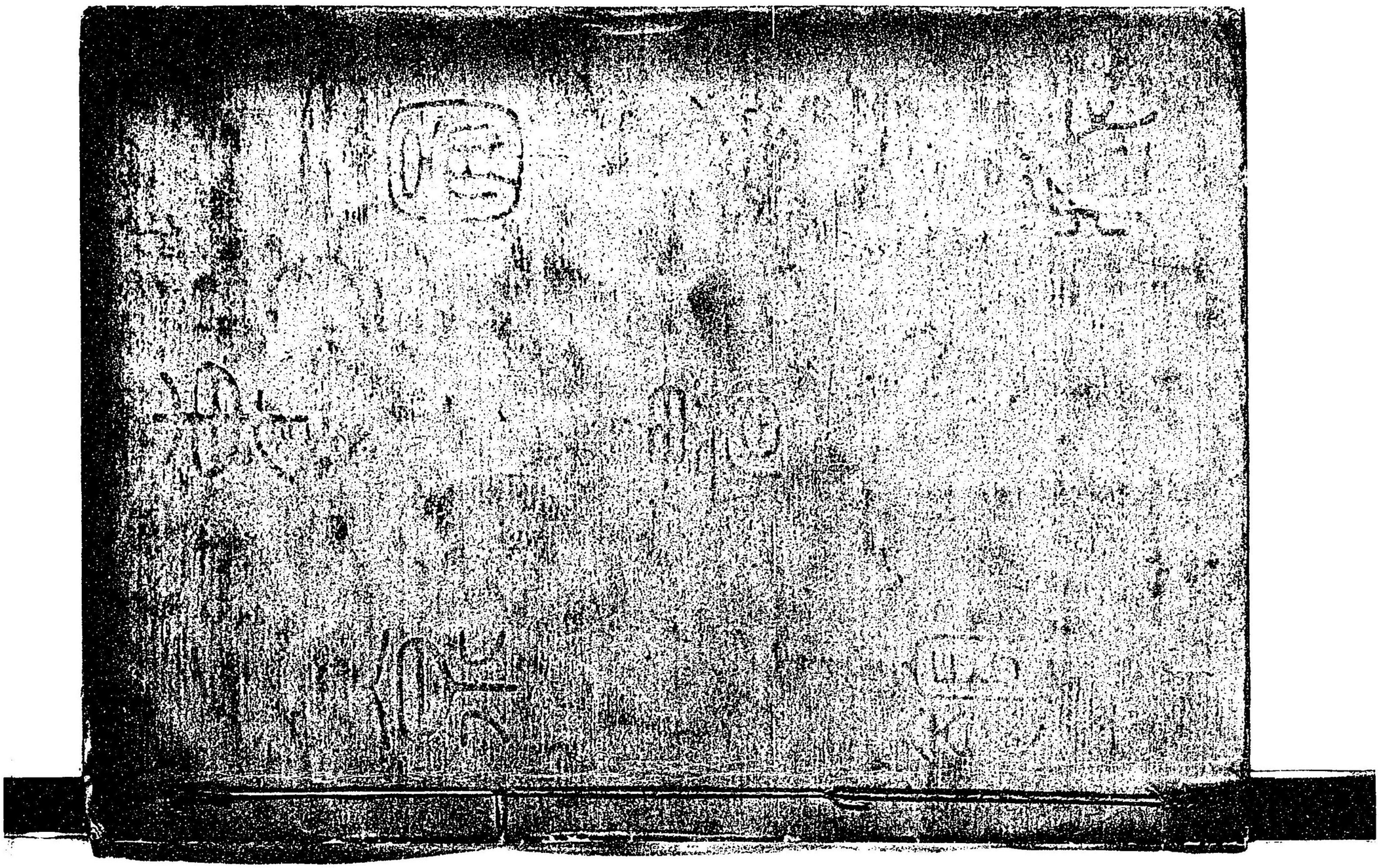
黑森は大街道の東びらは悉皆燒き拂はれまして殘つた家も倒れて仕舞ひ最も殘情を極めて居ります。廣野、押切、飛鳥、砂越、も亦大抵倒潰致し建ッてる家は僅かです、併し幸い大火を免かれましたから先づ〳〵不幸中の幸いです。松嶺は此諸地方よりも劣ッて居りますものゝ矢張火事も出來、倒潰の家も少くは御座いません

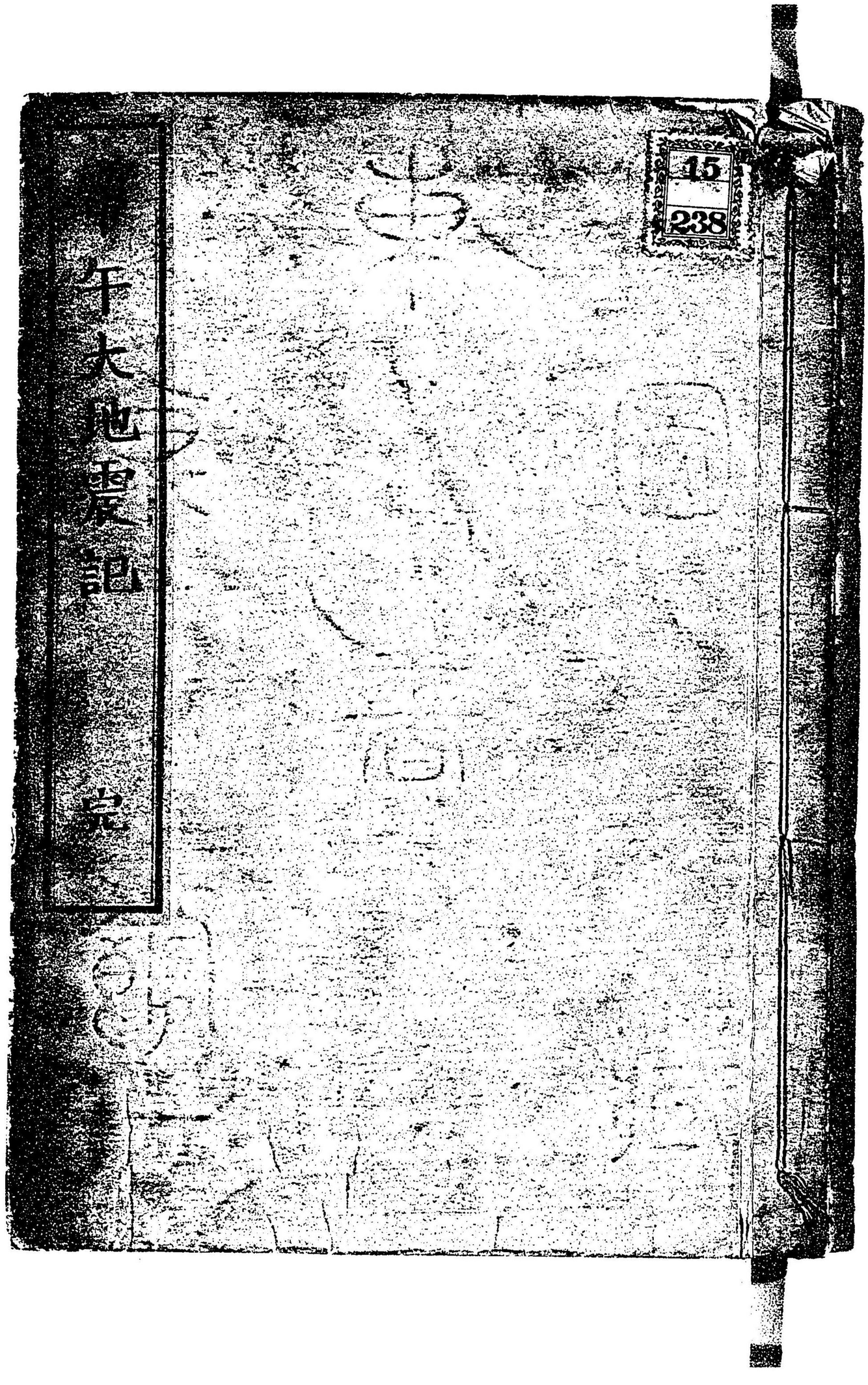
地震の中鳥海山腹に電光を見たと申す人も御座いましたが、出れば出るものゝ實際出たかどうかは未だ疑はしいとして置きませう

明治二十七年十二月十日印刷
同　年同月二十日發行

頁數	行數	誤	正
二	二	殺	刹
三	五	狹震少なる（ますた）	狹少なる（ました）
一五八			
三二三		四、八一一	四八二

山形縣西田川郡鶴岡町榮町乙十一番地
編輯兼發行者　菅原敎敏
同縣同郡同町馬場町甲三番地
印刷者　野澤正直
同　上
印刷發行所　野澤活版所





023475-000-8

15-238

東西田川飽海三郡甲午大地震記

鶴廼舎主人／述

M27

ADC-0447